A夫との日々

吉岡　晶子

――六月のある日の出来事、A夫は大声でワーワー泣きながら、自分で車のドアを開け、車を降りた――

日頃よくある保育の一コマのように見えるが、私にとっては感動的な忘れられないシーンである。

A夫は三歳児。入園してすぐの頃から、興味のままに、園庭、ゆうぎ室、他のクラスとどこへでも出向いて遊んでいた。そこで目に入ったものや気持ちをそそられることは、何でもその場で欲しくなり、すぐにやりたくなって実行に移すA夫。行く先々でトラブルが起きないはずはなく、「ワーンワーン」のA夫の大きな泣き

声か、「A夫君がやった……」の泣き声が聞こえない日はなかった。A夫にしてみれば欲しいのに手に入らない、やりたいのにやれないということになり、相手にとっては突然に取られた、やられたという感じであった。このようなA夫が幼稚園という新しい環境の中で様々な体験と葛藤を繰り返してきて、少しずつ周囲の状況の受け止め方やかかわり方が変わってきた。A夫との日々を、エピソードを思い起こしながら振り返ってみる。

それ欲しい――四月――

降園時間が近くなり、A夫がニコニコして部屋にもどって来た。他のこども達は帰る準備をして椅子にすわっている。A夫はB子のところにスーッと近付き、あっという間にB子が手に持っている紙で作ったアイスクリームを黙って取ってしまった。B子は泣き出す。二人で引っ張り合うがA夫も口にくわえて離さない。私は急いで同じものを作って「こっちがA夫君のね」とA夫に渡すが、受け取らず振り払い、ワーワー泣いて「A君の、A君の（自分のこと）」とB子のアイスクリームを握って離さない。A夫はB子の持つそのものが欲しいのであって代りのものは別のものなのである。B子も新たに作ったアイスクリームでは納得できないので、なんとかB子に戻した。

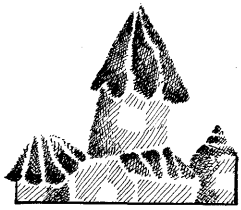
A夫にとっては欲しいものは何がなんでも欲しく、人のものも自分のものも同じ、それが実現できない状況は受け入れられず、抱かれたまましばらく泣いていた。このようなことがままごと道具だったり、作ったピストルや剣だったりと度々起きたが、「欲しいのよね、でもね……」と言いながら、大泣きするA夫の気持ち

に付き合うしかなかった。

誕生会のおやつ――四月――

はじめての誕生会の日。おやつのマドレーヌが一つずつお皿にのって配られた。はじめての体験なので〝いただきます〟の前に食べ始める人もいたりする。

ふと見るとA夫のお皿にマドレーヌが三個並んでいる。両隣りの二人のマドレーヌがなくなっているが、二人共キョトンとして状況がよくわかっていない雰囲気。思わず私が「これがA夫君のお菓子ね。これはC子ちゃんのお菓子、これはD夫君のお菓子ね」と戻すと、A夫は「ワーッ」と泣いて取り戻す。私がまた元に戻す。A夫にだけ三個あげるわけにはいかない。そのうちに、A夫は床にひっくりかえってワーワー泣き、なだめても抱いてもなかなか泣き止まない。「おかあさん、おかあさん」と言いながら泣くので一人だけ早目に降園準備をすると、もうすぐおかあさんに会えると思ったのか気持ちが少し切り替わり、落ち着いてきて泣き止んだ。でも、お菓子は何も食べずに終ってしまった。たくさん食べたかったのに何がいけないんだ、あれはぼくのものだという泣き声で、自分がしようとしたことにストップがかかったことが受け入れられず、そこからなかなか立ち直れなくなってしまった。だが、自分の状況が変わることで少しずつ自分の気持ちも切



り替わっていった。

このような出来事を繰り返していくうちにA夫にも変化が見られるようになった。

E子の袋――五月下旬――

E子が小さいビニール袋に砂利を入れて持っているのを見たA夫は、それが欲しくなったのかスーッと手を出す。その様子を見た私が、これは取ってしまうかも知れないと思い、「あれが欲しいの？　あれはE子ちゃんのもの、A夫君、待っててね」と言って急いでビニール袋を持って来た。A夫の目の前で「A夫君のはこの袋ね」「これがA夫君の」と言いながら袋に砂利を入れ、砂利袋を作って手渡すと受け取った。私がビニール袋を取りに行く間に手を出さずに待っていたこと、同じ様に作った別のものを受け取ったこと、共に驚きでありうれしい出来事だった。

A夫は、これまでの経験の中で、止められるだけでなく待つことを知ったのだろう。随分我慢もしたし、待った。待っていれば大丈夫ということを体験してきたことで待てるようになったのではないだろうか。

追いかけっこ――五月下旬――

A夫は廊下（我が園では長い廊下がある）で私を見つけると、私の顔を見てニコニコして逃げる。私は追いかける。A夫は立ち止まって後を振り返り、私が追いかけるのを待っている。またキャーキャー笑いながら逃げる。私が追いかける。A夫はまた止まって振り返る。これを何度も繰り返した。この時A夫ははっきりと相手を意識していた。しかも、自分が追いかける

のではなく、相手が来るのを期待して待ち、そのやりとりを楽しんでいる。それまでのA夫は自分の方から一方的な関心で追いかけたり向かっていく姿は見られたが、されるのを待つ、それも相手をちゃんと意識しているというのは見られなかった。

この頃、A夫が欲しいものがあると「貸して」と言うかわりに「貸してやる」という言葉が聞こえるようになり、それは相手側の言葉で、何度も言われてきた言葉であった。このような小さな変化や出来事が見られるようになり、私もA夫と楽しんだり、笑ったり喜んだりしていた。

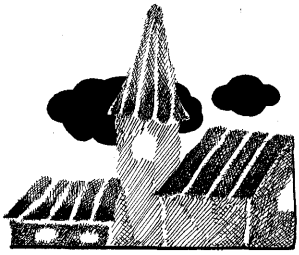
車を降りた日——六月——

ハンドルつきの一人乗りの車が園庭に登場して二日目。前日にもA夫はその車にたっぷり乗っていた。この日は、車に乗りたい人が何人もいて順番を待っている。年長児のリードで花壇を一周回って来て次の人と交代するという流れになっていた。A夫が車に乗り、年長さんが押して花壇を回り、みんなが待つ所にもどろうとすると、A夫が「あっち、あっち」と自分が行きたい方向へもっと遠くまで押してくれと指差すのである。「向こうに行きたいって言ってるんじゃない？」「でも、向こうで待ってるし……」など年長さんは口々に言い、どうしようか迷っている。A夫は「あっち、あっち」と言いながら大泣き。私は任せることにした。車はゆっくりと少しウロウロしながら戻って来たが、A夫は降りないで泣きながら「あっち」ともっと乗りたいことをアピールしている。「降りてね」「交代して」と頼むがA夫は降りない。「この子、きのうもずーっと乗ってたよ、もう

いいよ」という声も聞こえてくる。周囲もどうしよう、何とかならないかという雰囲気になる。

その時、A夫はワーワー泣きながら、自分で車のドアを開けて降りたのである。A夫は誰かに引っぱられて降ろされたのでなく、自分の意志で降りたのである。私は驚き、感動してしまった。近くにいた他の先生も驚き、二人で顔を見合わせてしまった。〝本当はいやだ、でもこの状況は受け入れざるを得ない、ぼく我慢する〟と泣いているのであろうA夫の顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃ。そういうA夫と、他の先生も私も（途中で交代）一緒にすわって順番が来るのを待ち、A夫は再び乗ることが出来た。

無理矢理A夫を車から降ろすのでなく、A夫の気持ちも考えてくれた車を押す人たち、順番待ちの人たち、みんながA夫にじっくり付き合ってくれたからこそ見られた光景だったと思う。



二学期になると、A夫の「先生！先生！」と叫ぶ声がどこからか聞こえてくるようになった。声のする方に行ってみると、車を押して欲しいということだったり、水に濡れた靴と靴下を何とかしてということだったり、自分では開けられないドアを開けて欲しいということだったりする。困った時や助けて欲しい時には、姿

は見えなくとも呼べば先生が来てくれると思っていたのだろう。これまでに、あちこちでトラブルが起きた時にはいろいろな先生がその都度かかわって何とかしてくれた。その体験の積み重ねで、頼れる人としての先生がA夫の中に位置づいたのであろうと思う。「先生！」が聞こえると、さて今日は何かなと思いながら声のする方に出掛ける日が続くようになったのである。

A夫はとても素直に自分の欲求を表わす。表現は一方的だったが、表わすことで様々な体験をしてきた。予期せぬ反応、断わられること、怒られること、でも楽しいことや嬉しいこと、譲ってもらったこともたくさんある。それらを体験しながら、A夫も少し譲って受け入れてもらえることも体験した。反応を受け、A夫もまたそれに応えるという周囲とのかかわりの中で少し我慢したら心地良いことにつながることがあることも感覚として知ったのであろう。

今までさんざん泣いて「どうしたの？」「どうしたいの？」と声をかけてもらってきたA夫は、今では、泣き声が聞こえるとどこからともなく現れて、「どうしたの？」と声をかけたりしている。そんなA夫との日々はとても面白く楽しい。

いろいろなことを巻き起こすA夫と一緒に遊んだり、泣いたり笑ったり怒ったりして本気で付き合ってくれる幼稚園中のこども達、それを支えながらていねいにかかわってくださる幼稚園中の先生方、みんなみんなにA夫と私共々本当に感謝している。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）